ドイツにおける民間人のホメオパティー治療

服　部　　伸

は　じ　め　に
Ⅰ．民間人治療の担い手たち
　1．職業的治療師
　2．民間人治療師から医師へ
　3．家庭治療としての民間人治療
Ⅱ．一般向けホメオパティー雑誌に見る民間人の治療報告
　1．さまざまな治療の可能性
　2．家庭，コミュニティー内での治療
　3．治療の試行錯誤と工夫
お　わ　り　に

キーワード：ホメオパティー，民間人治療，ドイツ

は　じ　め　に

19世紀後半のドイツでは，近代医学がようやく機能するようになり，目に見える効果を発揮する医療となってきた。それとともに，この医学の担い手であった医師は専門職としての権威を獲得するに至った。

この同時代に，正統医学に異議を申し立てるオルタナティブ医療を，それも，医師のように専門職として認知されていない民間人による治療を選び取った人びとが少なからずいた。本稿では，ドイツにおける代表的なオルタナティブ医療であるホメオパティーの民間人治療に着目することによって，治療者と患者の関係に新たな角度から光を当ててゆく。

ホメオパティーとは，18世紀末にドイツの医師ザムエル・ハーネマンによって考案された治療法である。18世紀までのドイツ医学は，ルネサンス期以来の解剖学の成果を取り入れてはいたが，いまだに思弁的な傾向が強く，大学における医学研究・教育は，患者の治療をするための実際的な医療を提供することはできなかった。ハーネマンの医学は，経験と観察に基づいて，実際に患者の疾病を解消することに関心が払われていた。しかし，患者に現れている症状と類似した症状の原因となる薬物を，酒精や乳糖を使って極限まで希

釈するという奇妙な治療方法は，同時代の多くの医師たちの批判を受けることになった。また，当時の革新的な医学者たちは，疾病局在論にたって，疾病の原因を体内の器官，さらには組織に病因を求めるようになり，ホメオパティーのような全体医学を時代遅れなものとして退けた。

正統医学が大半の疾病に対して決定的な治療法を開発できずにいた19世紀前半においては，ホメオパティーは，とりわけコレラ治療などで成果をあげ，一部の正統派医師からもそれなりの評価を受けることもあったが，正統医学が科学的医学として，治療効果をあげていった19世紀後半には，大半の医師が非科学的な医学として退けるようになった[1]。

ところで，ホメオパティー療法においては，ハーネマンの存命中から多くの民間人が医業者資格をもたずに治療を行っていた。クレメンス・マリア・フランツ・フォン・ベニンクハウゼン Clemens Maria Franz von Bönninghausen は元来は高級官吏であったが，ホメオパティー治療を受けて結核を完治させたことがきっかけになって，自らもホメオパティー治療法を学び，無資格で治療を行うようになった。彼はハーネマンの信頼も厚く，ホメオパティーに関する多くの著書を著し，後にはプロイセン国王から医師資格を与えられて，ホメオパティー医学界の中心人物となった。

ベニンクハウゼンとほぼ同時代に活動したアルトゥール・ルッツェ Arthur Lutze は，ホメオパティー医からは評価されなかったが，巧みな宣伝によってホメオパティーを民間人の間に普及させ，民間人の間では非常に人気の高い治療師であった。彼はケーテン公から医師資格を与えられ，ケーテンでホメオパティー病院を開業して成功した。彼の主著である『ホメオパティー教本』[2] は多くのホメオパティー信奉者によって愛読された。

彼らのように君主から医師資格を与えられなくとも，19世紀前半には民間人が各地で治療を行い，ホメオパティーの普及に努めていた。派手な宣伝活動をするルッツェに対しては，ホメオパティー医は警戒感を隠さなかったが，多くの民間人がホメオパティー医と協力関係を保ちながら治療を行った。

19世紀後半以降，民間人協会が発達するヴュルテンベルクの場合，最初にホメオパティーを邦国にもたらしたのは官吏のヴァンゲンハイム男爵 Freiherr von Wangenheim であった。彼は1773年にゴータで生まれ，1806年から1823年までヴュルテンベルクの大臣を務めたが，郷里にいた頃からハーネマンとは個人的な知り合いであり，彼から直接に治療を受けた経験があり，シュトゥットガルト赴任の際には，ホメオパティー家庭用薬箱を持参していた。

ヴァンゲンハイムは大々的に治療活動をしたわけではなく，ごく限られた人びとに対してのみ治療を行ったが，このグループの中には，テュービンゲン大学の哲学教授カール・エッシェンマイヤー Carl Eschenmayer などが含まれており，後にこの地域にホメオパ

ティーが広がるきっかけを作ったといえる[3]。彼は医学部に入学しながら，後に哲学に転向した経歴の持ち主であったが，哲学の本業とは別にホメオパティーとアロパティーの治療法の比較についての著書があった[4]。

一方，福音派神学部のトービアス・フォン・ベック Tobias von Beck 教授は，ホメオパティー普及に，より大きな功績のあった人物である。彼はバーゼルで学んでいた際に，ホメオパティーの治療法を身につけ，1842年からテュービンゲン大学で神学者として教鞭をとった。彼は受講者にホメオパティーを紹介し，彼のもとで学んだ多くの神学生たちは，後に邦国内各地の教会へと散らばり，教区内の人びとにホメオパティーの治療を施した。つまり，彼らはホメオパティーの地方への拡大を促した[5]。このように，ホメオパティーにおいては19世紀前半において，民間人が治療に加わる伝統が生まれていたのである。この伝統は，19世紀後半にも受け継がれてゆく。

帝政期においてホメオパティー治療が盛んになった理由の一つは，民間人が治療に関与したことにあると考えられる。帝政期からワイマル期を通じて，ドイツのホメオパティー医の組織であるドイツホメオパティー医中央協会加盟者数は，200人から300人程度で推移していた。また，帝国保健所の統計によると，1898年当時帝国全体で240人のホメオパティー医が開業しており[6]，特に大都会にはホメオパティー医が集中していた。たとえば人口1,667,304人のベルリンでは16人[7]，人口399,963人のライプツィヒでは 8 人[8]，人口158,321人のシュトゥットガルトでは 9 人[9] のホメオパティー医が開業していた。これらの都市では，ホメオパティー医の治療を受ける機会が十分にあったと考えられる。ただし，都市部においてもホメオパティー医の分布は偏在しており，ミュンヒェンでは 1 人のホメオパティー医も開業していなかった[10]。小都市や農村部でホメオパティー医の治療を受ける機会が少なかったことは言うまでもない。ドイツにおけるホメオパティー信奉者数と比べて，治療を提供するホメオパティー医の数が非常に少ないのである。

ホメオパティー治療を日常的に受けていた患者数を示す正確な統計は存在しないが，1929年にホメオパティー医エーリッヒ・ヘール Erich Haehl は，何らかのホメオパティー組織に加入する者が全国に約100万人おり，さらに，疾病の際にホメオパティー治療を実践する人びとがさらに数百万人いると見積もっていた[11]。さらに，1938年のアンケート調査によると，人口の約10.4%がホメオパティー治療を利用しているとのことであった[12]。1898年にドイツで開業していた医師総数は24,725人[13] であり，ホメオパティー医は全開業医の 1 %程度に過ぎないのである。これらのデータから，ホメオパティー信奉者に見合うだけのホメオパティー医が十分に供給されていなかったのは明らかであり，多くのホメオパティー信奉者は，医師の治療を受けずに，民間人の治療で間に合わせていたと推測できる。

ホメオパティー治療において民間人治療が重要な意味をもったことは明らかであり，本稿においては，オルタナティブ医療に対する人びとの関心が高まった19世紀後半から20世紀初頭の時期を中心に，民間人治療の実態を中心に明らかにしてゆく。

Ⅰ．民間人の治療の担い手たち

１．職業的治療師

それでは，19世紀後半以降にホメオパティー治療を担っていた民間人とはどのような人びとだったのであろうか。この時代に活躍した無資格民間人治療師として有名だったのは，ヴェルナー・フォン・デア・レッケ＝フォルマーシュタイン伯爵 Graf Werner von der Recke-Volmerstein である。

彼は，1795年に帝国直属の貴族の農園に生まれたが，４歳の時に麻疹にかかり，これがきっかけになって，以後長年にわたって眼病を患った。大学教授，国王侍従医などさまざまな医師を訪れ，瀉血，吐瀉療法，食餌療法，電気療法，交感療法など，さまざまな治療法を試みたが，いずれも成功しなかった。少年時には，いつかは治るという医師の言葉に期待をつないでいたが，青年期になると医師のこうした慰めの言葉を信用することができなくなった。たまたま，白内障を手術もせずに治す治療師のことを知り，この治療師により眼病は癒された。

その後も彼は胃病などを患い続けたが，30代半ばになってホメオパティーを知り，ハーネマンから指導を受けた著名なホメオパティー医で，王女ルイーゼ・フォン・プロイセンの侍従医であったカール・ユリウス・エギーディ Karl Julius Aegidi[14] の治療を受けるようになった。健康を回復した彼は，自らホメオパティーを学び，農園管理の仕事の合間に，独力で家族や農園に住む農民を治療するようになった。やがて彼の治療は評判になり多くの患者が彼に治療を依頼するようになった。彼は患者の診察を記録するようになったが，最初の１年で1653件にもなった。ただし，彼自身が語るところでは，営利で治療を行っていたわけではなく，患者からは一切治療費を請求しなかったという[15]。

治療行為によって生計を立てていたかどうかはともかく，フォルマーシュタインに代表されるように多くの患者を集める治療師がいたことは明らかである。フォルマーシュタイほどに知られた治療師ではないにしても，一般向けのホメオパティー雑誌で，自分が手がけたさまざまな治療について報告する者は，ワイマル期に至るまで確認できる。例えば，ヴァルデマール・ハメル Waldemar Hammel という治療師は，これから報告するような治療例は，多くの治療師も紹介することができるであろうがと断りながら，長年にわたる自分の治療経験を読者に知らせたいと，1929年に『ライプツッヒ民衆ホメオパティー雑誌』上で「私の診療」と題して60例の詳細な治療例を報告した[16]。ほぼ同時期には，ティーレ

W. K. Thiele という人物もやはり「診療から」という記事を 2 回にわたって同じ雑誌上に掲載している[17]。

この時期に民間人治療師が積極的に治療法についての報告を掲載したのは，ドイツのホメオパティー医の専門職団体であるホメオパティー医中央協会所属のホメオパティー医が，一般向けホメオパティー雑誌に治療法に関する記事を書くことが不可能になったからであった。これまで，ホメオパティー医は，一般向けホメオパティー雑誌上で，詳細な治療例を報告し，実質的には，患者に対して治療について指南してきた。ところが，正統医学の医師が主導権を握る医師専門職団体は，非正統医学に基づく治療を勧めることは，同業者である正統医学の医師を批判することにあたり，医師会議所の倫理規定に反すると警告した。ホメオパティー医の地位を医師専門職団体に認めさせたいホメオパティー医中央協会は，同協会会員であるホメオパティー医が，一般向けに雑誌上で，具体的な治療例を報告することを禁止した[18]。その結果，一般向け雑誌において，上に述べたような民間人の治療報告が増加したのである。つまり，19世紀後半以降ワイマル期に至るまで，治療例や診断方法を指南することができるエキスパートの無資格民間人が存在していたのである。

それでは，このような治療師の実像はどのようなものだったのであろうか。実は，ホメオパティー治療師に関する具体的な史料は驚くほど少ない。ここでは，地方小都市の文書館から偶然に発見されたある治療師のカルテ類から，この治療師の活動を再構築したファルティンの研究を紹介することにしよう。

ファルティンが取り上げたのは，オイゲン・ヴェンツ Eugen Wenz という人物で，1856年に豊かな企業家の長男としてシュトゥットガルトに生まれた。父はシュトゥットガルトの北にあるルードヴィヒスブルクでタバコ工場を営み，経営はうまくいっていた。彼はルードヴィヒスブルクのギムナジウムに学んだが，両親が1868年と1869年に相次いで死亡したために，1872年から代父のもとで商人としての修行を始めた。

しかし，少年時代から宗教的な関心が強かったヴェンツは，29歳だった1885年に，説教師になるべくアメリカに渡り，セントルイスの学校に入学した。ところが，1 年後には，彼は教師や学友との人間関係に疲れ果て，幻覚に悩まされるようになった[19]。

学校を辞めて故郷に戻ったヴェンツは，とりあえず日々の暮らしをたてるために，1888年から，シュトゥットガルトのシャルロッテ療養所 Charlottenheilanstalt にいたオスカー・ケーニヒスヘーファー Oskar Königshöfer のもとで秘書として働くようになった。彼は正統医学の治療を施す，普通の医師であったが，ここでの労働がきっかけとなって，ヴェンツは医療に興味をもつようになった。1892年には，テュービンゲンで開業していたホメオパティー医エーミール・シュレーゲル Emil Schlegel のもとに移り，1895年まで彼の秘書として働いた。この間，ヴェンツはホメオパティーの治療法を修得したことになる。

1895年には彼は独立し，シュヴァルツヴァルト北端に位置する，当時人口900人の小さな町ミューリンゲン Mühringen にマリーエンバート Marienbad という療養施設を設立した。医師会議所から開業を認可された際には，この施設が，患者を収容するために専用に設けられたものではなく，その客が望む場合に，ヴェンツの指導のもとで入浴療法を行うことができる，一般の旅館にすぎないことが確認されている。しかし，現実にはマリーエンバートは一般の旅館ではなく，療養施設であった[20]。

ところで，マリーエンバートは入浴療法による治療を主としていたわけではない。彼自身が，自分の治療法を「複合的な治療法」と呼んでいたが，これは，具体的にはホメオパティーとさまざまな自然療法的な要素とを結合させたものであった。つまり，彼はホメオパティーの治療薬を投与し，その効果を高める目的で，入浴，冷水浴，日光浴，マッサージ，湿布，吸入，食餌療法，体操などを併用し，患者の細かい生活指導も行った[21]。

ヴェンツはこの施設が都会からの転地療法を行うには理想的な立地条件にあると考えていた。マリーエンバートの広告ビラには，炭酸水のミネラルウォーターが豊かに湧き出ることで有名になっているアイアハ川の谷間 Eyachtal で，その美しい自然のたたずまいとロマンティクな観光地を求めて観光客が訪れる場所にこの施設があり，多くの人びとが，気分転換や治療のために訪れていると述べられている[22]。

しかし，彼が残したカルテから，彼の治療を受ける患者の大半が，近隣の地域に住む人びとであったことが判明している。彼がマリーエンバートで治療した患者444人のうち，77人がミューリンゲン町内の居住者，287人が半径10キロ以内の近隣からの患者であった。シュトゥットガルト，ジグマリンゲンなど，比較的遠方からの患者も多少はいたが，全体から見れば，ごく一部にすぎなかった[23]。つまり，セバスティアン・クナイプ Sebastian Kneipp が営んでいたバート・ヴェーリスホーフェンの療養所のように，全国から療養客が集まってくるような施設ではなく，近隣の医療を支えていたのである。

このことは，マリーエンバートで水療法を受けた患者数からもある程度裏付けることができる。1897年と1898年に，ここへ療養に来たのはそれぞれ年間20人にすぎなかった。ところが，温水浴またはいすを利用した水療法を受けた患者は，1897年に300人，1898年に250人を数えた[24]。つまり，遠方から来てじっくりと療養をする人はきわめてまれであり，ほとんどの患者は日帰りだったのである。

ここに来た患者の職業を見てみると，患者総数のうち，農業従事者が20.3%，手工業従事者が37.8%，飲食業が10.4%，商人が7.2%，公務員・聖職者・芸術家などが15.3%，工業が2.7%を占めていた。このように，患者は都市的な職業よりも，農村的な職業に従事していた者が多く，地元民が多かったことを裏付けている。ただし，患者の中には，教師，牧師，市長，工場長なども含まれており，患者が社会的に下層に偏っていたわけではな

い[25]。つまり，医師が不足する小都市での医療を支える存在だったのである。

ヴェンツは，シュトゥットガルト，テュービンゲンなどの新聞にも広告を出すなどして，療養客の獲得につとめたが[26]，結局，彼はマリーエンバートの経営に失敗し，1899年にはミューリンゲンを離れて，シュトゥットガルトで開業することになった。しかし，この町は，1899年の調査によると，186人の医師が居住する激戦地であり[27]，彼はここでも失敗した。その後，彼はいくつもの町を転々とし，最終的には1913年にバーデン邦国東部の小都市ブレテンで開業するようになった。その後，1937年に81歳の高齢を理由に一線を退くまで，この地で民間人治療師として開業を続けた。この小都市では，特定の療法にこだわらず，「何でも屋」として治療を続けるとともに，医療・健康関係の商品の販売によって生活を安定させた[28]。

ヴェンツの活動から，無資格の治療師でも，ある程度は患者の需要があり，場所を選んで工夫をすれば，治療師として生計を立てることも可能であったことが伺える。ただし，これが容易ではなかったことは，彼の度重なる失敗からも明らかである。そして，19世紀前半の民間人治療師と比べて顕著な相違点は，ヴェンツの臨床研究が，ホメオパティー医に大きな影響を与えることがなかったことである。ヴェンツは多くのパンフレットやビラで自分の治療を披露しているが，ホメオパティーの専門雑誌などからは全く顧みられなかった。結局，ヴェンツは，ホメオパティー医の目の届かないところで隙間を埋めたにすぎなかった。

この一例からホメオパティー治療師全体像を語るのは危険かもしれない。しかし，このようなホメオパティー治療師は，ドイツで盛んであったもう一つのオルタナティブ医療である自然療法と比べると，その影響力は小さかったと考えるべきであろう。自然療法においては，多くの著名な民間人治療師が活躍していたことが知られているし，このような治療師たちの治療レベルを一定水準に保つために，認定試験を行ったり，治療師養成学校を設立する動きがあった。また，自然療法治療師の職業団体も結成され，自分たちの地位を守る努力をしていた[29]。

これに対して，ホメオパティーでは民間人治療師の活動はそれほど目立っていない。自然療法信奉者向けの雑誌『自然医師』には，さまざまな治療師の活動が記事として掲載されているが，ホメオパティーの雑誌では，治療師の存在に触れられることはまれであった。また，治療師の職業団体と呼べるものが活動していた形跡がないのである。

2．民間人治療師から医師へ

ヴェンツの例からもわかるように，ホメオパティー民間人治療師の仕事は必ずしも割の良い仕事とは言い難かった。そのためか，民間人治療師としての道を歩みかけながら，途

中から大学へ進んだ例もある。ここでは，アメリカでホメオパティー医学博士の学位を取得した後，ドイツに戻ってホメオパティー医として開業したリヒャルト・ヘール Richard Haehl を見てみよう。

ヘールは1873年にキルヒハイム Kirchheim で，ガラス職人の息子として生まれた。母親がホメオパティーを信奉していたことから，すでに幼少の頃からこの治療法に親しみ，ホメオパティーに関する書籍にも目を通していた。彼の母親は，自分の家族ばかりではなく，知人に対してもホメオパティーの治療を施していた。こうして医学に対する興味をもった彼は，12歳の時に，母親から少しずつもらう小遣いをためて，安く売りに出されていたフーフェラント Christoph Wilhelm Hufeland の著作などを購入した。しかし，夜中まで寝室でこれらの書籍を読みふけっていたことを，ランプの油の無駄遣いと父親にとがめられ，夜の読書を禁じられるような境遇のもとにヘールはあった[30]。

このような家庭であったため，彼は小学校での成績が優秀であったにもかかわらず，ギムナジウムへの進学を認められなかった。親方であった彼の父親にとって，古典語の勉強などは，職人の道を歩むであろう息子には全く無意味であった。

結局，ヘールは実科学校に進むことになった。ここでの授業では，幾何学，物理学，植物学，動物学などの授業に興味をもったが，この学校も，教会で堅信を受ける年までしか通うことを許されなかった。当時キルヒハイムにあった実科学校は，堅信の年齢までの生徒を収容する不完全な学校で，さらに勉強を続けるのであれば，遠くシュトゥットガルトやエスリンゲンの学校へ進まなければならなかったのである。実科学校の恩師の説得も不発に終わり，ヘールは14歳で学校教育から離れ，父親のもとでの徒弟修行に入った[31]。

こうして，ヘールの職人としての修行が始められたが，ホメオパティー治療を行っていた母親の影響を受けて，その後も医療への関心を失わず，先に述べたルッツェの著書などを読んでいた。

このころ，キルヒハイムにも結成されたホメオパティー民間人協会を通して，ヘールは，ハーネマンがうち立てた治療の基本原理や，個々のホメオパティー治療薬がいかなる疾病に対してどのような効果をもつのかについて学ぶようになった。そして，彼は，ホメオパティー治療に関するいくつかの教本をマスターした。

彼が18歳になった1891年のある日，キルヒハイムのホメオパティー民間人協会は講演会を催し，講師としてヴュルテンベルクホメオパティー民間人協会ハーネマニアの会長だったアウグスト・ツェップリッツ August Zöppritz を招いた。ヘールは彼と引き合わされたが，彼はこの少年に関心をもち，一度シュトゥットガルトへ来るようにと彼を招待した。

ヘールがシュトゥットガルトへ赴くと，ツェップリッツは，アメリカ合衆国のホメオパティー医養成施設で勉強して資格を取らないかと勧めた。修学資金は，民間人協会ハーネ

マニアが運営していたホメオパティー医養成のための医学生財団[32]が貸し付けるが，そのための条件として，アメリカで資格を取得した後，当時ツェップリッツが就いていたハーネマニアの書記職とその機関誌『ホメオパティー月報』の編集職を，引き継ぐことを求められた。ヘールはこの条件で快諾した[33]。ところで，通常，奨学生の採否は，医学生財団の理事会で協議されて，決定することになっていたが，ヘールに関しては，理事会で協議された形跡がなく[34]，ツェップリッツが独断で決定したとしか考えられない。

その後，ヘールは留学に反対する父親を説得しながら，留学の準備に取りかかった。まず，留学先としてアメリカのホメオパティー医養成施設の情報を集め，もっとも優れたものとしてハーネマン医科大学を選んだ。ここの入学には，英語，ラテン語の知識を求められたため，地元に住むカトリック司祭からラテン語を，滞英経験のある老婦人から英語の手ほどきを受けた。また，自然療法を実践する医師の無給見習いをしたり，当時すでに有名になっていたクナイプの水療法を知るために，彼の療養施設があるバート・ヴェーリスホーフェンを訪れた。このような修行を積んだ後，彼はアメリカへと旅だった[35]。

1894年にヘールはフィラデルフィアのハーネマン医科大学に入学した。この大学では，ホメオパティーの理論，実験，臨床を幅広く身につけることになっており，外科についてもかなり高いレベルを要求されていた。当時アメリカでは通常2年で医学部を卒業できたが，この大学では臨床実習を重視して，3年間の在籍が普通であった。そして，合計4年間の在学で，通常の医学博士とホメオパティー医学博士の2つの学位を取得することが可能であった。臨床などの経験をより多く積むことが求められたため，学期の合間の休暇中にも，臨床実習が行われており，実質的には休暇などなかった。ヘールは1898年にここで資格試験に合格し，ホメオパティー医学博士の称号を得た[36]。

卒業後のヘールには，そのままフィラデルフィアに残って医療・研究を続ける道も残されていたが，ツェップリッツとの約束があったため，彼はドイツへ戻り，ツェップリッツの仕事を引き継ぐとともに，シュトゥットガルトで開業を始めた。

その後約10年間にわたって，平日の診療と，週末の講演活動が彼の主たる仕事となった。多くの患者が彼を信頼していた反面，とりわけ開業当初には，「ホメオパティー医学博士」という称号が，同僚医師たちの不信を招き，同僚医師の間で孤立した[37]。

しかし，彼の神経をすり減らせることになったのは，ハーネマニア書記および機関誌編集者としての，組織の運営，講演・執筆活動であった。彼が運営を引き継いだハーネマニアは，内紛によって組織が疲弊しており，内部での相互不信も強かった。会員数も減少傾向にあった。これを立て直すことが彼の第一の任務だったのである。組織が弱体化していたからこそ，彼は各支部での講演会で講演して，組織を引き締めるとともに，新たな会員獲得のきっかけにしようとした[38]。

こうした状況にあって，ヘールは臨床医師として活動のかたわらに，ホメオパティー医学史の研究に着手した。彼は，自分が編集する『ホメオパティー月報』に，ハーネマンやホメオパティー発展に関する歴史の記事をしばしば執筆した。ヘールは，ハーネマンの足跡をたどるだけではなく，彼の書き残した歴史的な史料を収集し，これに基づいてハーネマン伝の執筆に取りかかった。

1922年にヴィルマー・シュヴァーベ社 Willmar Schwabe[39] から刊行された彼のハーネマン伝は，今日まで，高い評価を受けている。ティシュナーの『ホメオパティーの歴史』[40]に比べると，ヘールの著作は，ハーネマンの直筆など，より正確な史料に基づいている。とりわけ，その第 2 巻は史料集であり，ハーネマン研究者にとっては，有用な著作として現在でも利用価値が高く，今日に至るまでのハーネマン研究の基礎を築いたといえる。また，残された草稿をもとに，ハーネマンの『オルガノン』第 6 版を出版したが，これが現在でも発行されている同書の原型となっている[41]。

臨床医としての評価も高く，婦人病の治療法についての業績で知られる[42]が，彼の活動は単なる治療にとどまらず，当時女性の間で普及していた，体を締め付けるコルセットが有害であると主張し，衣料改革運動にも足跡を残し，体を締め付けない理想的な下着の考案にもたずさわった[43]。これらの活動は，世界的にも評価され，国際ホメオパティー評議会，ドイツホメオパティー医中央協会，アメリカホメオパティー協会など多くのホメオパティー組織がヘールを名誉会員の称号を与えた[44]。つまり，一般のホメオパティー医以上に功績があったことが，同僚の医師たちから認められたのである。

以上，ヘールの経歴を見てきたが，彼の場合は，ホメオパティー信奉者だった母親や，ホメオパティー民間人協会の活動を通して，ホメオパティー治療師を志向する方向が定まったが，奨学金を得てアメリカの大学でホメオパティー医療を学ぶ機会を与えられたことによって，その質が大きく変化した。その後の彼の活動は，大学教育によって獲得した治療能力・知識・研究能力および，ホメオパティー医学博士としての社会的な信用に基づいていたと考えるべきであろう。

民間人として治療を行っていた者が公認の医師になったという点では19世紀前半のベニンクハウゼンと同様であるが，ベニンクハウゼンの場合は，医師資格を与えられる以前から，すでに医師と対等の知識・能力を獲得しており，これを国家が追認したことになる。しかし，専門職化が完成した19世紀末のドイツにあって，大学外での個人的な学習で，医師に求められるだけの知識・能力を獲得することが困難になっていたうえに，制度的にも，国家が医師資格を追認するということはあり得ないことだった。アビトゥーアに合格していない，実科学校中退のヘールには，ドイツ国内で大学へ進学することは考えられず，アメリカでの学位取得は，彼がホメオパティー医になるうえでは唯一の方法だった。

ヘールと同じようにホメオパティー民間人信奉者の家庭に育った者が，大学医学部に進学し，医師国家試験に合格してホメオパティー医になるというケースは，ハーネマニアの奨学金財団の台帳と理事会議事録から幾例か確認できる[45]。19世紀末には，ホメオパティー治療を生業にするのであれば，医師国家試験に合格して医師資格を取得することが必要な時代になってきたのである。

あえて医師になることを彼らが目指してのは，もちろん医師の社会的ステータスへの願望があったであろう。しかし，次章で例示するように，当時のホメオパティー信奉者たちのあいだには，無資格の治療師に対するある種の不信感があったことも間違いない。

3．家庭治療としての民間人治療

すでに述べたように，ホメオパティー治療においては，ホメオパティー医が指導的な役割を果たしてきたとはいえ，全国に数百万人もいた信奉者を治療するのに十分な数でなかった。しかも，職業的なホメオパティー治療師は，自然療法に比べると遙かに人数が少なく，影響力も小さかった。

それでもホメオパティー治療を受ける人びとが人口の１割にも達していたのは，結論を急げば，ある程度ホメオパティー治療に熟練した人びとが，家庭あるいは小さなコミュニティー内で親しい人びとに対して治療を行っていたからだと考えられる。

以下では，この点を個々の事例から確認してゆきたい。まず最初に取り上げるのは，ヴュルテンベルクホメオパティー民間医療協会ハーネマニアの初代会長を務めたヨーゼフ・キルン Josef Kirn である。彼は1824年にフロイデンシュタット郡の小村で生まれ，母親の希望に従って民衆学校の教員となった。補助教員を経て1849年にシュトゥットガルト郊外のヘスラッハ Heslach で下級教員となり，1851年に結婚したが，1853年に最初の子どもを肺炎で亡くす不幸に見回れ，このことがきっかけになって，彼はもっと良い治療法を探し求めるようになった。やかてシュトゥットガルトのある商人を通じてホメオパティーのことを知り，この療法が民間人でも実践可能なことを知った。彼は大量のホメオパティー関連図書を買いこんで治療法を研究するとともに，幅広く治療薬をそろえた。

20年来肋膜炎を煩っていたキルンは，1856年に肺出血を繰り返したが，彼は自分でホメオパティーによる治療と食餌療法を行って回復した。この時期から，清浄な空気が健康によいと信じるようになった彼は，室内の空気を清潔に保つとともに，清浄な外気にできるだけ触れるようになった。ホメオパティー，食餌療法，清浄な空気のおかげで，壮年期に結核を患うことがなかったと彼は考えた[46]。

やがて，キルンはホメオパティー民間医療運動に深く関わるようになっていった。シュトゥットガルトで活動していた民間人ホメオパティー協会にキルンも加わり，1867年には

この協会の会長に就任した。彼は会長として，組織改編にたずさわり，1868年に結成された新協会ハーネマニアでも理事に就任した[47]。

結成間もないハーネマニアの宣伝活動のために，キルンは『医療における真実』というパンフレットを執筆した。パンフレットは 2 部構成になっていて，第 1 部では，学校医学の治療によって引き起こされる，さまざまな問題点を明らかにし，第 2 部では，ハーネマンによる類似療法原理の発見，希釈による効果の増大など，ホメオパティーの基本を説明した[48]。このパンフレットは11,000部印刷されて，ヴュルテンベルク邦国内の教員，聖職者，邦国・市町村の上級官吏，さらには国王に至るまで，社会的に影響力の多い人びとに配布された。このパンフレットは，ホメオパティーを知らない人びとの偏見を取り除き，この療法に対する関心を喚起するためのものであり[49]，学術的な価値をもってはおらず，専門家に訴える目的ではなかった。その証拠に，学校医学の医師向けには，別のパンフレットをホメオパティー医が執筆していた[50]。

彼は1899年の年次総会まで31年間にわたって理事を務めたが[51]，この間も，教員としての本業を続けている。1859年にはヘスラッハで副校長に昇進し，さらに，1882年にはシュトゥットガルトで上級教員に昇進した。その後も，1895年に71歳で年金生活にはいるまで，教員を勤めた[52]。つまり，彼にとってはホメオパティー治療は，自分の健康を守るためのものであり，専業の治療師として日々の糧を稼ぐ手だてではなかったのである。

『ホメオパティー月報』に掲載されたハーネマニアの有力会員に関する死亡記事を見てみると，手工業的外科医，薬剤師など医療に関わる職業をもっていた者もわずかに含まれているが，大半は医業とは関係のない職業に就いていた人びとであった。

ハーネマニア設立時に，理事に就いたフィッシャー Fischer も，幼少時に病弱であり，青年時代には，学校医学の医師から結核の疑いをもたれたことから，自分の健康を守る手段として，ホメオパティーに興味をもつようになったが，彼もまた教員であった[53]。やはり，少年時代に生死に関わる大病をした後，学校医学への不信感からホメオパティーに近づいたツェップリッツは，ハーネマニア設立時からの理事で，『ホメオパティー月報』の編集担当や，協会の書記，会長などを歴任したが，本業は工場主であった。また，キルヒハイムの地域協会設立に関わったテオドーア・クットラー Theodor Kuttler は上級営林官として70歳近くまで働いた。また，すでに上で述べたヘールの母親は主婦で，家族や隣人の治療にホメオパティーを使った。

このように，さまざまな職業をもつ人びとや家庭の主婦が，自分自身とその家族を治療するために，ホメオパティーについて学び，必要な治療薬を家庭で揃えていたのである。

確かに，何人かの教員や牧師は医師の少ない地域に赴任した際に，医師に代わって，かなり高度な治療を行った。この場合，治療を受ける患者はかなり広範囲になるが，交通の

不便で人口の少ない僻村では，それほど多くの患者を抱えていたとは考えられない。教員や牧師として，隣人たちの世話の延長線上で，村の住人を治療したのであり，医業を生業としたわけではない。

そして，こうした活動を行っていた人びとの中から，民間人協会の指導者として活躍する者も現れ，機関誌やパンフレット記事を執筆したり，地域の人びとに対して講演会を開いて，広報活動を行ったのである。

そして，このような広報活動を通じて，あるいは何らかの偶然でホメオパティー治療に興味をもった人びとは，民間人協会に入会することによって，自ら治療するための知識を，先輩で治療のエキスパートから学んでゆくことになるのである。

各地の結成されたコミュニティーレベルの協会では，さまざまな教育的な活動が行われていた。ハイデンハイム地域協会では，月例会において講演が行われ，とくにホメオパティーの治療実践のために，個々の症状がいかなる疾病であるのかを説明し，この疾病に対してどのような薬品を利用するべきであるかを説明した[54]。とくに，医学の専門家でない会員が実際に家庭で役立てることができそうなテーマとして，初期治療についての講演はくり返し行われた[55]。

ハイデンハイムでは，ホメオパティーを知るための前提条件として，一般的な医学・衛生学などについても講演している。とくに，解剖学の知識が不可欠であることが強調され，協会として解剖図，人体モデル，臓器モデルなどを購入して，講演の際に利用している。この講演会では，質問箱のコーナーが設けられていて，会員がホメオパティーの治療について疑問に思ったことを匿名で質問することができ，これに対して講演者が回答した。ちなみに，講演を行うのは通常は会員の中で治療の知識と経験が豊富な者であり，会員同士が教えあう関係にあった。

会員が自らホメオパティーを自主的に学ぶための手段として，協会設立当初から協会の図書室が設けられた場合もあった。ハイデンハイム地域協会では，1903年には101タイトルの書籍のほか，シリーズもののパンフレット38部を所蔵していた。1913年には図書購入費として900マルクが使用されている[56]。つまり，民間人協会の活動に加わることで，ホメオパティーに関心のある人びとは，自分で治療するために必要な知識を獲得し，家庭内やコミュニティー内での治療に役立てたのである。

Ⅱ．一般向けホメオパティー雑誌に見る民間人の治療報告

1．さまざまな治療の可能性

19世紀後半以降はドイツにおいてホメオパティー信奉者の民間人協会が活発に活動した時期であった。この時期に西南ドイツを地盤としていた民間人協会ハーネマニアでは，民

間人による治療が奨励されていた。同協会の機関誌『ホメオパティー月報』の創刊号には，ホメオパティー治療と自然療法を普及させ，ホメオパティー医による診察を受けられない民間人が，疾病の際に，高価な治療費を支払わずに，自分で家族を治療することをめざすと述べられていた[57]。

患者に治療法を知らせる目的で，『ホメオパティー月報』や『民衆ホメオパティー新聞』のような民間人向けホメオパティー雑誌には，民間人によるさまざまな治療体験が掲載されている。ここでは，これらの雑誌に掲載された治療報告から，民間人治療の実態を探ってみよう。まず最初に紹介するのは，上述のフォルマーシュタインによる報告である。

彼の治療報告で目に付くのは，女性の生理不順を伴った疾病である。そのうちのいくつかを見てみよう。ある20代の独身女性は半年間生理が止まっていたうえ，肺病を患っていた。彼女に対しては，乳糖によって30回希釈したリン酸カリウム Kalium phosphoricum の粉薬を６包与え，１包を朝晩それぞれ１回の２日分として服用させた。８日後には生理が始まり，４週間後には胸の痛みも完全に消えた[58]。

29歳の女性は，やはり生理不順で，過去１年間は，全く生理が止まっており，頭痛と目の痛みを感じていた。30回希釈したリン酸カリウムの粉薬を６包与えたところ，すでに６日目には激しい引きつけとともに生理が始まり，その後，徐々に他の痛みも和らいだ[59]。

18歳の少女は春に風邪を引いたことがきっかけに，生理が止まったうえ，10月16日には母親が死亡したショックで，11月１日以降は，左半身が不随になり，舌や手足が不自由になった。地元の正統医学の医師が治療に失敗した後になって，村の村長が書簡でフォルマーシュタインに相談してきた。

フォルマーシュタインは，１月２日に，セイヨウオキナグサ Pulsatilla とイグナチア Ignatia をそれぞれ６包処方した。この２種類の薬を２日おきに交互に服用するのである。１包が２日分で，それぞれ日に４回，大さじ１杯ずつである。これで４週間の間は効果が持続することになる。２月15日にはリン酸カリウムを６包与え，１包を２日間で服用させた。やはり，毎日４回大さじ１杯ずつである。５月２日付の村長からの書簡には，この娘の生理が３週間前から戻るとともに，すべての障害がなくなったことが報告されていた[60]。

別の18歳の女性は生理中に，冷たい水に落ちたショックのために生理が止まり，癲癇発作を起こしたが，アヘン Opium とカルカレヤ Calcarea carbonica の混合物を６包与えたところ，癲癇は起こらなくなり，生理も回復した[61]。この例では，生理不順と癲癇が同時に発症したが，フォルマーシュタインは，癲癇の治療もたくさん手がけていた。

バイエルンに住む19歳の少年は癲癇発作の際に，非常に憂鬱な気分に陥っていた。彼は長期間にわたって臭化カリウム Bromkali を服用していたが，そのたびに嘔吐を繰り返した。狂気じみた絶望感へと誘う鬱症状に陥った彼は，神の恩寵には期待がもてないと非難

し，神によって自分の罪が許されないという妄想を抱いた。彼は，寝ても覚めても心安らぐことがなく，神の助けについてのあらゆる慰めや助言も，何の救いにもならなかった。そこで，彼は精神病院へ連れていかれたのである。

このような状態の時に，フォルマーシュタインは書簡で相談を受け，さっそくリン酸カリウムを5包を送りつけた。1包を2日分とし，これを1日に4回大さじ1杯ずつ服用したところ，3包を服用したところ，不安をかき立てる鬱症状が消えた。そして，ゆったりとした気分になって，ぐっすりと眠れるようになり，話し声も元気になった。癲癇も嘔吐も跡形もなく消え去った[62]。

23歳の女性は，17歳の時から原因不明の癲癇発作に襲われるようになっていたが，30回希釈したリン酸カリウムの粉薬を6回分与えたところ，発作は起こらなくなった[63]。また，44歳の婦人は，数年来癲癇を煩っており，2度にわたるひどい発作の後に治療に訪れた。塩素酸カリウム Kalium chloratum の粉薬を6包与え，12日間にわたって，朝晩服用させたところ，以後，発作は全く起こらなくなった[64]。

なお，彼は癲癇はホメオパティーによって完治可能であり，精神病院に入院させる必要がないことを力説していた[65]。ここでは，いくつかの癲癇治療の例を示したが，患者によって治療薬が異なることがあった。これは患者の体質や，癲癇の状態によって，全く異なる治療法をとるためである。また，生理痛と癲癇という全く異なる疾病で，同じ治療薬が使われることもあった。このようなことは，ホメオパティー治療では珍しくない。

このほかにも，神経性の疾患と思われる患者が多数いた。たとえば，非常に多忙なある編集者は，ここ1年来，顔面神経痛で，顔の右半分の痛みがどんどんひどくなってきていた。効き目が6週間続くことになるリン Phosphorus 4包を処方したところ，6週間後には，痛みはなくなったという便りを書いてよこした。さらに1年後には，その後も健康が続いていることに感謝するという礼状が届いた[66]。

また，バイタリティーあふれる男性は，2年前から呼吸困難を伴う動悸に苦しんでいた。動悸の際には，少しばかりの坂道を登るのもままならず，手が震えるのであった。7月18日に，フォルマーシュタインはリンとキナ China の混合物を8包処方した。1包を2日分とし，これを1日に4回大さじに1杯ずつ服用させた。8月6日には，この男性はフォルマーシュタインに次のように書いてよこした。「私に送られてきた治療薬は，すばらしい効き目で，動悸はなくなりました。今や，動悸や息切れを心配することなく，坂道を楽々と登ることができます。ところが，腕の震えは治りません。先生の薬でこれも治ればと思います。」そこで，フォルマーシュタインは，8月18日にリン・カルカ(ママ)レヤを10包処方した[67]。

次の例も，精神的な問題を含んでいたと考えられる疾病であるが，これまでに示した例

よりもはるかに複雑な治療が必要であった。30歳の独身女性は，頭痛，不整脈，冷え症，耳が熱くなるといった症状に悩まされていた。さらに，右目は見えず，左目は度重なる医師の医療過誤によって羞明で，炎症を起こしていた。まず，リン酸鉄 Ferrum phosphor が 3 包，続いて塩素酸カリウムが 6 包与えられた。これによって目が回復する兆しが現れた。その上で，ベラドンナ Belladonna とキナがそれぞれ 4 包処方された。これによって，目の回復の際に現れた激しい頭痛が抑えられたが，今度は，はっきりと視力が低下した。そこで，リン酸カリウムが 6 包，さらに 4 週間後にはベラドンナが 6 包処方された。服用後の数週間にわたって，視力は再び低下し，ついにはほとんど失明状態になった。しかも，両目の痛みはなお続き，炎症もあった。

このように一進一退を繰り返した後，フォルマーシュタインはアコニット Aconitum（トリカブトからの抽出物）とベラドンナ 6 包与え，患者は，ようやくはっきりと回復に向かった。痛みはなくなり，視力も回復を続けた。やがて一人で通りを歩けるようになり，さらに読み書きも可能になった[68]。この例が示すように，ホメオパティーでは，治療を進めるうちに症状が一時的に悪化することもよくある。

次の例は，ある母親が自分の子どもの死後，自分の過失を責めて狂乱状態に陥るという痛ましいものである。どのような病気であったのかは分からないが，この女性は，2 時間ごとに子どもに薬を与えるようにかかりつけの医師から命じられていた。2 日間は決められたとおりに薬を与え続けたが，3 日目に疲労のために母親は眠り込んでしまい，目を覚ますと子どもは死亡していたのである。自分が子どもの死亡に責任があるという考えにとりつかれ，もはや家事もできなくなったという。そして，夫や他の子どもたちも彼女のことを殺人者と見なしているように思われた。

さらに，夕方になると騒がしい人影に付きまとわれているように感じるようになった。ベットに横たわる時には布団を頭までかけたが，それでも人影から逃れることはできず，彼女はベットから飛び出して，10日間にわたってベットでゆっくり休むこともできず，家中を歩き回って静けさを探し求めたのである。この苦痛を終わらせるために，自ら命の奪おうという考えに彼女はとりつかれていた。しかし，自殺は罪であることを彼女は知っており，この考えに抗していた。それでも，それほど長くは抗することはできないであろうと彼女は感じたのである。彼女の心はすっかり暗くなってしまい，慰めの言葉は彼女の心には届かなかった。そのため，心の中でいつも同じ考えが休む間もなくわき起こっていたのである。

フォルマーシュタインは，イグナチアとバイケイソウ Veratrum を 4 包ずつ与え，1 包を 2 日分として，1 日ごとに 2 つの薬を交互に，そして，1 日に 2 回に分けて服用するように指示した。14日後には彼女はすっかり健康で精神的にも落ち着きを取り戻してい

た[69]。

典型的な慢性病であるリューマチの患者もフォルマーシュタインの治療を受けた。次の例は，彼がベーメンのヨハニスバートに滞在していた際に，彼の評判を知っていた見知らぬ人から，教会の中で突然治療を依頼されたものであった。

この地に療養に来ていた34歳の女性は6週間前から関節のリューマチを煩い，関節は腫れ上がり，痛みに苦しんでいた。フォルマーシュタインはアコニット，ブリオニアBryonia，イコデンドロン（毒ウルシ）Rhusそれぞれ3包を，別々のコーヒー茶碗1杯の水の中に溶かした。この3種類の治療薬を，2時間おきに1つずつ順番に，大さじ1杯ずつ飲むのである。彼は，看護人に，正確に時間ごとに服用するようにと念を押した。

フォルマーシュタインが退出する時に，ちょうど彼女の夫が戻ってきたが，夫はフォルマーシュタインを見ると非常におびえた表情になった。夫の心配は治療費の問題だと思った彼は，自分が医師でも薬剤師でもなく，治療費を取らないことを告げた。すると，夫は安心して，丁寧に礼を言った。1週間後にもう1度訪れてみると，患者はすっかり元気になっていて，リューマチは完治し，すでに前日には散歩にも出かけていたと告げた。彼女はフォルマーシュタインに自分の関節を見せたが，腫れは引き，痛みも全くなくなっていた[70]。

皮膚病でもホメオパティーは治療効果を上げている。8歳の少年は腺病を長期にわたって煩っており，頭と顔全体が，かゆみを伴って，臭いを発する膿のでる苔蘚に覆われ，炎症を起こした目からも膿が出ていた。30回希釈したリン酸カリウムを12日間にわたって朝晩，アコニットを，2日間にわたって，2時間ごとに小さじ1杯，それぞれ服用させた。3ケ月後には，頭からは発疹が完全に姿を消し，再び毛髪が頭を覆うようになっていた。ただ，耳の後ろのごく小さいが，じくじくして，臭いを発する箇所が残っていた。また，目も元に戻って，学校に通うことができるようになった。その後シリカ（二酸化珪素）Silicea を4包与えて完治した[71]。

またある時は，ひとりの男がやってきて，34歳になる自分の妻を助けてほしいと請うた。彼女は20週間前から水腫ができていて，すでに15回も医師が穿刺して水を抜いたたが，6～7日後にはいつも水腫が現れた。治療にあたった医師の説明によると，完治することはなく，穿刺を繰り返すしながら生きてゆくしかないのである。

フォルマーシュタインは，亜砒酸 Arsenicum album とキナを6包ずつ与え，12日間にわたって，2時間ごとに交互にスプーン1杯ずつ服用するように指示した。この患者は，主治医にはホメオパティー治療のことは何も説明せず，必要に応じて穿刺をさせた。8日後に患者の夫がやってきて，この間に2回しか穿刺は必要なかったと報告した。そこで，その薬を引き続き服用させた。その次の報告では，穿刺が必要になるまでに10日かかった。

さらに同じ薬を続けた。次の報告によると，穿刺が必要になるまでに15日かかり，医師は驚いたとのことだった。その次の穿刺は21日後であった。患者は食欲が出てきた。そこでヌクス・ヴォミカ Nux vomica とキナを処方し，６日間にわたって朝夕に一口ずつ服用するように指示した。その６週間後に，夫婦は，完治したことのお礼を言いに，そろって１マイルの道を歩いてやって来た。この婦人はその後も健康で暮らしたという[72]。

２．家庭，コミュニティー内での治療

フォルマーシュタインの報告は，おそらくは家庭内治療を志す信奉者たちにとっては教科書的な意味があったと考えられる。しかし，一般向けホメオパティー雑誌の治療紹介は，必ずしも選り抜きの治療師だけに限定されなかった。こうした雑誌では，一般読者からの治療体験が掲載されているのである。たとえば，1870年の『民衆ホメオパティー雑誌』誌上には，「家庭での治療から」と題して，ある教員が自分の治療について述べている。

最初の事例は，耳の痛みに関するものであった。子どものひとりが，風の中を歩き回った日の夜，片方の耳に激しい痛みを訴えたことがしばしばあった。その際，体温が上がって，寒気をともなった。痛みは耳の奥から頭にまで至った。しかし，これ以外にとくに不快な症状はなかった。子どもにベラドンナを服用させると，やがて痛みはひいた。痛みが耳に限られる場合にはオキナグサのガラス瓶を開けて匂いをかがせるのがよい。

また，春か夏に，子どもが歩く際に足を引きずり片方の膝に痛みを訴えたことがあった。冷たい地面の上や石の上に座っていたことが原因だと子どもは訴えていた。最初に往診に来た正統医学の医師は水銀軟膏と思われる軟膏を太腿の付け根に塗り込むようにと処方した。この部分のリンパ腺が腫れていて痛みの原因と考えられたからである。しかし，彼は医師の指示には従わず，痛みがひどくなったときに，ベラドンナを服用させたところ，子どもの痛みは全くなくなった。

彼は，自分で赤痢も治療していた。９月に新ジャガイモを味わった時に，この教員は，不注意にもすぐに水を飲んだところ，激しい腹痛を起こしたことが２回あった。便には血が混じり，最初は赤く，後には粘性をもった。のどが渇き水を飲みたくなったが，水を飲むたびに症状は悪化した。ひどい渋り腹で，トイレットに行き，明らかに赤痢の症状であった。腹痛治療のためにコロシント Colocynthis を服用し，痛みが和らぐと，排便のたびに昇汞 Mercurius sublimatus corrosivus を服用して渋り腹を治した。同様に，この教員の妻が軽症のコレラに罹った際には，トコン Ipecacuanha と白バイケイソウ Veratrum album を服用させて治療に成功していた[73]。

彼は，最初の事例で明らかなように，微妙な症状の違いによって服用する薬を使い分けていた。また，２つ目の事例では，正統医学の医師の診察を子どもに受けさせながらも，

結局は，自分の知っているホメオパティーの治療法で治療していた。そして，赤痢やコレラのようなかなり症状の激しい疾病の際にも，医師に頼ることなく，自分でホメオパティー治療を行っている。これらのことから，かなりホメオパティー治療の経験を積んだ熟練者であったことが推測できる。

次に紹介するのは，ホメオパティーでは珍しい外科治療成功例で，ゲッピンゲン近郊に住むある民間人が『ホメオパティー月報』に投稿したものである。報告によると，９月16日に，６歳になる男の子が，飼料裁断機に右手中指を近づけたところ，指を巻き込まれた。その際，中指は右から左へ１回転半して，軟部（皮膚・筋肉）全体，一方の靱帯は引き裂かれ，爪の部分が切断された。

このような状態で，男の子は畑に出ていた両親の元へ走っていって助けを求めたが，出血がひどいので，両親はこの子を家に連れて帰り，この投稿者に治療を依頼した。彼が診察に来た時には，男の子の右手中指は，血や汚物（潤滑油と埃）がへばりついた肉塊のようであった。彼は指を洗い，応急処置として包帯を当てたが，とても自分の手には負えないと考えて，すぐに医師の治療を受けるように勧めた。

しかし，医師の診察を受けると，指を切断されるのではないかと恐れた両親は，医師の治療を受けようとしなかったのである。そして，翌日に，男の子の父親がせっぱ詰まった様子で再び診察の依頼に来た。息子は医師の診察を受けようとしないが，包帯を取り替えなければならないというので，彼は新しい包帯に取り替えた。

さらにその翌日には，傷口から膿が出ていたため，毎日包帯を取り替えて，治療を続けることにした。最初の１週間は，化膿している指にアルニカ Arnica，マリーゴールド Calenduda とオトギリソウ Hypericum のチンキを塗布して，木綿の包帯をきつく巻き付けた。

２週間目のある日，彼は本業が忙しくて往診に行かなかったところ，この少年の父親が来て，自分で包帯を取り替えようとしたが，腐敗臭がすることを告げた。そこで，彼は男の子を診察した。アルニカを使って膿をふき取り，純正のチンキを塗布した。しかし，１日中ひどい膿が出るため，治療師は，敗血症になることを心配して，ナイフの背の厚さで蜂蜜をガーゼに塗り，指に巻き付けた。その翌日には，膿はなくなり，蒸留水で希釈したオトギリソウとマリーゴールドのチンキによって傷は次第に収まり，10月６日には完治した。その後，12月には爪も元通りになった[74]。

３．治療の試行錯誤と工夫

ほとんどの投稿者は，成功例を投稿していたが，次に見るのは失敗例である。投稿当時，すでに年金生活を送っていた牧師が，現役時代の赴任先での治療について述べたものであ

る。ある時，この牧師は，奇妙な発作を起こす男の子の治療を頼まれた。発作を起こした時には，患者は歯をかちかちと鳴らせて震えていた。しかし，しばらくすると発作は収まり，気分も良くなった。ところが，その日のうちにか，翌日には発作が再発した。発作と発作の間には，男の子は気分が良くなっていたので，危険な症状ではないと牧師は考え，さまざまなホメオパティー治療薬を，当てずっぽうに試してみた。しかし，患者が全く回復しなかったので，郡医が呼ばれた。彼はすぐに患者が間欠熱に罹っていることに気づき，キナを使って治療したのであった[75]。

間欠熱の特効薬がキナであることは古くから知られている上，ハーネマンがホメオパティーの原理を発見するきっかけになったのがキナによる間欠熱治療であった。ホメオパティーでは，間欠熱にはキナを使うことはもっとも初歩的な治療であった。しかし，多くの症例を見ていない民間人には，診断は難しいのである。この牧師も，しばしば診断を誤ることが，民間人治療の弱点であると述べている。

また，治療薬を誤って使うこともあった。眼炎の際にはベラドンナが効くことが知られているが，これは内服薬として使用するのである。ところが，この牧師は，誤って点眼薬として使用したことがあった[76]。このように，自分の治療に確信をもてないことが多かったのか，自分の手に負えない患者には，有名なホメオパティー医を紹介している[77]。

しかし，彼は，施設の不十分な農村にあって，ジフテリアに罹病した子どもの治療に成功している。この子どもを診察した正統医学の医師は，手術をすれば助かるであろうが，農村には十分な施設がなく，手の施しようがないと判断した。その後で，この子どもは牧師の診察を受けたのであるが，牧師ははシアン酸第二水銀 Mercurius cyanatus 投与し，子どもは健康を回復した。彼はこの薬物を利用することによって，いつもジフテリアの治療に成功していたという[78]。また，インフルエンザにかかった子どもの治療には，１リットルの水に20滴のヨードチンキを落として，この水溶液を吸入させる方法を採っていた[79]。

この牧師のように農村に居住していると，獣医の代役として，家畜の治療も頼まれることもあった。ある時などは，黄疸の馬が彼のもとに連れてこられた。すでに獣医が治療を試みたが失敗し，以後，数日間にわたって全く餌を食べなくなっており，非常に衰弱していた。牧師が硫黄 Sulphur を投与すると，馬は再び食欲を取り戻した。２，３週間にわたって同じ薬剤を投与し続けて，この馬は全快した[80]。このように，ホメオパティーでは人間と並んで家畜の治療も行われていた。僻地の農村では獣医がいないために，民間人がホメオパティーによって家畜を治療することは珍しくなかった。ヴュルテンベルク北東部のある無医村の村長は，自分とその家族ばかりか家畜もホメオパティーで治療したのである[81]。

おそらく，さまざまな失敗を繰り返しながら，民間人は自分なりの治療法を見つけ出し

ていったのであろう。以下では，民間人の我流治療例を紹介しよう。

ある民間人は，ホメオパティーと他の治療法を組み合わせて治療に成功したことを報告している。23歳の石工は，２年半の間，膿痂疹（とびひ）に悩まされ，長期間にわたる学校医学の医師による治療を受けていたが，病状が回復しなかった。全身に膿疱が広がっていたが，とくに両足，首筋，頭がひどいと患者は訴えた。最初の処方は，６回希釈した硫黄を朝晩５滴ずつ服用することだった。１週間後には，かなり症状が良くなっていたが，この治療を４週間続けたところ，体の痛みは全くなくなった。それからは，首筋に残っていた膿疱を治療するために，30回希釈したカルカレヤを１日に５滴服用させた。

また，この治療を行っている間には，患者には24度の水に10から12分間全身浴を毎日行わせるとともに，生と煮た野菜を中心とした菜食による食餌療法を併用させた。療養中の飲酒も厳しく禁じられた。その後も，およそ２週間の間，上半身注水，太股注水，30秒間の首までの水浴，全身洗いを続けた。なお，この場合に使用する水は，普通の冷たい水で，これに果実酢を加えた。

この民間人のこれまでの経験から，以上のような治療を加えることで，患者の状態が一層良くなるのである。とくに，水療法については，クナイプ式を採用しているという。水療法を行うことで，この石工は気分が良くなり，生きる気力もわいてきた。彼はクナイプ式の水療法を続けることによって，その後も元気にしていたという[82]。

また，肺炎の治療にも，水療法や食餌療法を併用していた。23歳の農夫が，激しい呼吸困難，高熱，のどの痛みを伴う肺炎に罹った際には，まず，６回希釈したアコニットを２時間おきに５滴ずつ服用するように処方した。しかし，４度の服用によっても発汗せず，症状の改善が見られなかったため，６回希釈したアコニットと６回希釈したブリオニアを，１時間おきに交互に５滴ずつ服用させることにした。８時間後には咳がやみ，穏やかな発汗が始まるとともに，たびたび排尿しなければならなくなった。

その後８日間は，２つの薬を，４時間おきに交互に服用し，患者は健康を取り戻した。平行して，やはりクナイプ式の治療が行われた。１日に2回，30分から２時間程度，カラスムギのわら煮汁で作った湿布を当てた。さらに，15から20分間，24度の水での座浴し，胸と背中は，酢を混ぜた水を１日に２回流した。水浴したり，洗った後は，濡れたままですぐにベットに戻り，その効果が出るのを待つようにした。

また，療養中には食餌療法も行った。完全な菜食で，食事量を抑え，生と煮た果実，リンゴ茶，レモネード，蜂蜜入りワイン，バターミルクを摂取させた。この民間人は，食餌療法によって薬の効き目が良くなることは経験済みであり，患者の栄養摂取を抑えることが重要であることを重ねて強調している[83]。

お わ り に

以上，帝政時代に活動していたホメオパティー民間人治療の実情を見てきた。ホメオパティー治療においては全国で開業するホメオパティー医の数が患者数に比して非常に少なく，ホメオパティー信奉者の多くが医師以外の者から治療を受けなければならなかった。しかし，職業的なホメオパティー民間人治療師の数は，自然療法の場合と比べて著しく少なく，患者たちのあいだで大きな影響力をもたなかった。結局，治療の担い手は患者自身であったと推測される。

すなわち，ホメオパティーの民間人治療においては，治療する側と治療される側の関係が流動的であり，一般の医師・患者の関係のように固定されていない。ひとりのホメオパティー信奉者が，ある時は，患者として他人の治療を受けていたが，またある時は，治療者として他人や自己を治療していた。彼らは医師と患者の境界に立っていたといえる。

彼らは民間人協会に所属することによって，治療に関するさまざまな情報を提供され，セルフケアに役立てたと考えられる。民間人協会が開催する講演会や一般向けホメオパティー雑誌の記事などは，会員が治療に関する知識を得るうえで重要なメディアだった。

こうした雑誌に掲載された治療報告は，神経性の疾患から，皮膚の疾患，耳痛，膝痛などの痛み，リューマチ，赤痢，コレラ，ジフテリア，インフルエンザなどの細菌やウイルスによる流行病，さらに外傷性疾患にいたるまで多様な治療の可能性を示していた。今日，ホメオパティー治療がどちらかといえば科学的医学では治療効果がはっきりしない慢性病や神経性疾患などに重きを置いているのに対して，19世紀後半から20世紀初頭の時代には，あらゆる疾病をホメオパティーによって治療しようとしていたことがわかる。当時の人びとの関心事は，感染病対策であり，ホメオパティー信奉者もこうした関心を共有していたことになる。

フォルマーシュタインは，自分のもとには，医師の手に負えなかった患者が多数訪れたが，このような患者の病を治すことができなかったことは一度もなかったと豪語し[84]，1,000にも及ぶ治療例について教示する準備があると述べるなど[85]，大学教育を受けたホメオパティー医よりも自分が優れていると確信していた。

確かに，フォルマーシュタインは，ホメオパティー医の治療には多くの誤りがあると述べている[86]。大学ではホメオパティー治療については何も教えないので，ホメオパティーを実践しようと思えば，自分で勉強するしかないのである。ホメオパティーの治療技術を得るためには大学は役に立たないのであるから，ホメオパティー医と民間人の差があるわけではなく，むしろ経験を積んでいれば，民間人が医師よりも優れていると彼は考えていたようである。あるいは，科学的医学についての知識があるばかりに，ホメオパティーと

科学的医学の治療法を併用して，かえって悪い結果を生む危険があることを示唆している。

しかし，民間人の場合，先の牧師が経験したように，臨床経験が少ないために，的確に病気の診断ができないことがあった。大学教育を受けた医師であれば，付属病院での研修を通じて多数の症例に接することができ，この牧師が犯したような誤りは少なかったはずである。たとえ，ある疾病に効果のある治療法を書籍や講演会を通して知っていたとしても，患者の前に立った時に，その疾病であるという診断を下せないとすれば，治療は不可能である。風邪程度ならともかく，日常的には発生しない疾病の治療は，よほど臨床訓練を受けていなければ困難だったのである。そして，いくつかの記述から明らかなように，家庭内やコミュニティー内で治療を行っていた者は，自分の治療能力に限界を感じており，時には，医師の治療を患者に勧めることすらあったのである。

このような限界をもちつつも，多くの患者が民間人によるホメオパティー治療を受けようとした。フォルマーシュタインのような著名な治療師のもとに集まってくる患者たちは，長年にわたって何らかの疾病を患い，正統医学の医師による治療によっても満足な効果を得ることができなかった。そこで，わざわざ彼の治療を受けたのである。ただし，リューマチ治療を受けた女性の夫が，治療師が法外な治療費を請求するのではないかと案じていたように，治療師に対する警戒心が患者の中に存在していたのも事実である。

他方，コミュニティーでささやかな治療を行っている民間人のもとを訪れる患者の場合は，身近な治療アドバイザーとして気軽に治療を依頼している。農業機械でけがをした子どもの父親に見られるように，医師に対する恐怖心をもっていたこともあった。

いずれの場合も，ホメオパティーに治療効果を積極的に期待していたのかどうかは定かではない。むしろ，科学的医学やその担い手である医師に対する不満や失望が，他の治療法へと患者を向かわせたと考えるべきであろう。科学的医学の評価が高まり，医師の社会的な権威が高まった時代にあって，医師による科学的医学治療を避けた人びとの姿から，科学的医学における医師・患者関係への患者たちの不満が逆照射されているといえる。

なお，かつて筆者は，ホメオパティー民間人協会がホメオパティー医を重視していたことを指摘した[87]。このことと，末端での患者自らの治療とは矛盾しない。いざというときに高度な治療を提供してくれる医師がおり，時には彼らが治療法について講演などを通じて指導することで，民間人による家庭治療，コミュニティー内の治療がスムーズに行われたのである。

注

1　拙著『ドイツ「素人医師」団』（講談社選書メチエ，1997年）参照。
2　Arthur Lutze, *Lehrbuch der Homöopathie,* Cöthen 1860.
3　*Geschichte der Entwicklung der Homöopathie in Württemberg,* Stuttgart 1889, [*Geschichte*], S. 3; Richard Haehl, David Steinestel, in: *Homöopathische Monatsblätter* [*HM*], 1921, Nr. 5, S. 37.
4　*Geschichte,* S. 11.
5　*HM,* 1879, Nr. 2, S. 15.
6　*Medizinal-statistische Mittheilungen aus dem Kaiserlichen Gesundheitsamte,* (Beiheft zu den Veröffetlichungen des Kaiserlichen Gesundheitsamtes), 1901, S. 2*.
7　Ebenda, S. 24*.
8　Ebenda, S. 70*.
9　Ebenda, S. 74*.
10　Ebenda, S. 60*.
11　Erich Haehl, *Geschichte des Deutschen Zentralvereins Homöopathischen Ärzte,* Leipzig 1929, S. 114.
12　Eberhard Wolff, *Gesundheitsverein und Medikalisierungsprozeß: Der Homöopathische Verein Heidenheim/Brenz zwischen 1886 und 1945,* Tübingen 1989, S. 49.
13　*Medizinal-statistische Mittheilungen aus dem Kaiserlichen Gesundheitsmate,* 1901, S. 2*.
14　彼の伝記は，Ralf Vigoureux, *Karl Julius Aegidi: Leben und Werk des homöopathischen Arztes,* Heidelberg 2000.
15　*HM,* 1884, Nr. 7, S. 96–105; *Populär Zeitschrift für Homöopathie* [*PZH*], 1928, Nr. 1, S. 10–14; Nr. 2, 33–36.
16　*PZH,* 1929, Nr. 1, S. 14–16; Nr. 2, 31–32; Nr. 3, 53–55; Nr. 4, 72–74; Nr. 6, 109–111; Nr. 7, 133–135; Nr. 8, 155–157; Nr. 9, 173–174; Nr. 11, 207–210; Nr. 12, 230–232; Nr. 13, 252–254; Nr. 14, 272–273.
17　*PZH,* 1929, Nr, 8, S. 146–149; Nr. 9, 166–168.
18　拙稿「専門医制度の成立とオルタナティブ医療」，望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』（昭和堂，2003年）134–135頁。
19　Thomas Faltin, “Das unsichere Brot eines von Aerzten diskreditirten Heilkundigen.” Der Laienheiler Eugen Wenz (1856–1945) und seine Naturheilanstalt “Marienbad” in Mühringen, in: *Medizin Gesellschaft und Geschichte* [*MedGG*] 13, [Marienbad], S. 168.
20　Ebenda, S. 173–174.
21　Ebenda, S. 176.
22　Ebenda, S. 180.
23　Ebenda, S. 181.
24　Ebenda, S. 180.
25　Thomas Faltin, “Kranke Menschen zum Lichte des Lebens zurückführen.” Der Laienheilkundige Eugen Wenz (1856–1956) und die Stellung der homöopathischen Laienheiler um 1900, in: Martin Dinges (hrsg.), *Homöopathie,* Heidelberg 1996, [Laienheiler], S. 194.
26　Faltin, Marienbad, S. 181.
27　*Medizinal-statistische Mittheilungen aus dem Kaiserlichen Gesundheitsamte* 1901 S. 74*.
28　Faltin, Laienheiler, S. 204–205.
29　拙稿「治療師の養成・資格制度」，望田幸男編『近代ドイツ資格社会の展開』（名古屋大学出版会，2003年）参照。
30　Erich Haehl (hrsg.), *Zum Arzt berufen,* Leipzig 1934, S. 19–20.
31　Ebenda, S. 48–51.
32　拙著『ドイツ「素人医師」団』193–201頁参照。
33　Ebenda, S. 55–56. 彼が受けた奨学金については，奨学金財団の資料に記録が残されている。Insititut für Geschichte der Medizin der Robert Bosch Stiftung [IGM], V. 20, S. 58–59.
34　IGM, V. 21.
35　Erich Haehl, *Zum Arzt berufen,* S. 56–63.
36　Ebenda, S. 106–124.

37 Ebenda, S. 150.
38 Ebenda, S. 154–156.
39 1866年にライプツィヒで設立されたホメオパティー製薬会社で，ホメオパティー関係の出版も手がけた。Vgl., Volker Jäger, Im Dienste der Gesundheit. Zur Geschichte der Firma Willmar Schwabe, in: *MedGG* 10, S. 171–188. ティシュナーの『ホメオパティー史』も1932年に同社から出版されている。
40 Rudlf Tischner, *Geschichte der Homöopathie,* 4Bde. Leipzig 1932–1939.
41 Hahnemann, *Organon der Heilkunst,* Textkritische Ausgabe der 6. Auflage, Heidelberg 1992, S. IX.
42 *HM,* 1932, Nr. 5, S. 65.
43 Erich Haehl, *Zum Arzt berufen,* S. 194ff.
44 *HM,* 1932, Nr. 5, S. 67.
45 Vgl., IGM, V. 20, 21, 22.
46 *HM,* 1911, Nr. 4, S. 50.
47 *Geschichte,* S. 30–32; *HM,* 1911, Nr. 4, S. 51.
48 Hahnemannia, *Die Wahrheit in der Medizin,* Stuttgart 1870; *HM,* 1911, Nr. 4, S. 52.
49 *Aus der 25jährigen Geschichte der Hahnemannia,* Stuttgart 1893, S. 5.
50 Ebenda, S. 4.
51 *HM,* 1911, Nr. 4, S. 51.
52 Ebenda, S. 50.
53 *HM,* 1899, Nr. 7, S. 120–121.
54 Wolff, *Gesundheitsverein,* S. 113.
55 Ebenda, S. 115.
56 Ebenda, S. 140–141.
57 *HM,* 1876, Nr. 1, S. 1.
58 *HM,* 1890, Nr. 1, S. 4.
59 Ebenda, S. 5.
60 *HM,* 1890, Nr. 2, S. 17.
61 Ebenda, S. 19.
62 Ebenda, S. 22.
63 *HM,* 1890, Nr. 1, S. 5.
64 Ebenda, S. 4.
65 *HM,* 1884, Nr. 8, S. 116.
66 *HM,* 1890, Nr. 2, S. 17.
67 Ebenda, S. 20.
68 Ebenda, S. 18–19.
69 *HM,* 1884, Nr. 8, S. 116.
70 *HM,* 1890, Nr. 2, S. 20–21.
71 *HM,* 1890, Nr. 1, S. 6.
72 *HM,* 1984, Nr. 8, S. 115–116.
73 *PZH,* 1870, S. 71–72.
74 *HM,* 1890, Nr. 2, S. 25–26.
75 *HM,* 1903, Nr. 4, S. 57.
76 Ebenda, S. 57.
77 *HM,* 1903, Nr. 5, S. 79.
78 *HM,* 1903, Nr. 4, S. 56–57.
79 Ebenda, S. 57.
80 Ebenda, S. 56.
81 Robert Moser, *Auch ein schwäbisches Pfarrersleben,* 5. Heft, Meimsheim 1903, S. 49.
82 *HM,* 1891, Nr. 9, S. 136–137.
83 Ebenda, S. 138–139.

84　*HM,* 1890, Nr. 1, S. 1.
85　*HM,* 1890, Nr. 2, S. 23.
86　*HM,* 1890, Nr. 1, S. 3–4.
87　拙著『ドイツ「素人医師」団』，第 5 章参照。
＊本稿は平成12年度～平成15年度科学研究費助成基盤研究(c)(2)研究成果の一部である。